

# 地質ニュース

NO. 13

1955-1

地質調査所

## タイ国バンコックで開かれた E C A F E 地域の地質図作成会議 および 第一回 鉱産資源開発小委員会会議 附 タイ国内の見学旅行

これらの会議は1954年11月1日から5日までと、11月8日から13日までの2回にわたって、E C A F E (国連アジア極東経済委員会) 事務局の所在地タイ国バンコック市の Santitham Hall で開催された。

両会議とも1953年4月東京で開かれた鉱産資源開発地域会議の際に、その必要性が認められ開催を予定されていたものである。

地質図作成会議には日本からは地質調査所の河野地質部長が出席し、鉱産資源開発会議には代表として西尾東大教授が、また代表代理として鉱山局の小泉鉱業課長と地質調査所の河野地質部長が、民間側からは三井金属の西脇地質部長と日本軽金属の安田副社長が出席をした。

### 地質図作成会議

この会議には12カ国代表と万国地質学会長であるフランスのブロンデル博士ら約30名が参加し、5日間にわたって次のような主要事項を決議した。

#### (1) 地質図の縮尺

E C A F E地域の地質図は1:500万で印刷することに決定した。これには反対する国もあつたが万国共通の縮尺に統一するためには止むを得ない。

#### (2) 国境附近の地質図作成に関する問題

国境附近の地質調査の場合は関係国の共同調査班を編成することや、国境地域地質の調整に関し互に話し合ふべきである。

#### (3) 地質構造的資料

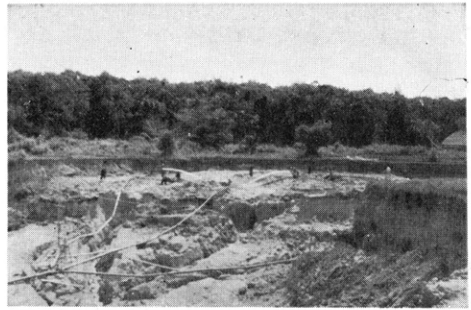
今回は地質図を主とし、地質構造図は重要ではあるが



バンコック Santitham Hall 会場



水上市場 (バンコック)



Gravel Pump 法 (ブケット島、錫鉱山)

地質図完成後に準備する。

#### (4) 層位学的尺度

層位学的区分の標準尺度は国際地質学会で採用のものに従うこととし、次の区分を決定した。

- a. 第四紀 (Quaternary) (2または3に区分)
- b. 第三紀 (Tertiary)
 

(鮮新世、中新世、漸新世、始新世、暁新世とし、もしく上記の細分不可能の場合は新第三紀と古第三紀とに分ける)
- c. 第二紀 (Secondary) [中世代 Mesozoic]
 

(白堊紀、ジュラ紀、三畳紀)
- d. 第一紀 (Primary) [古生代 Paleozoic]
 

(二疊紀、石炭紀、デボン紀、シルル紀)  
 オルドビス紀、カンフリア紀に分ける)  
 (石炭紀の2分し得られる所では上部と下部に分けるも可)
- e. 先カンブリア紀 (Pre-Cambrian)
 

(5億~12億年と12億年以上との二大区分が一般であり、国によつては不整合、堆積輪廻、火成活動、絶対年による三大区分が可能である。)

#### (5) 火成岩

侵入岩 (intrusive rock) と噴出岩 (effusive rock) とは明瞭に区別すべきである。

##### a. 侵入岩

酸性・中性・塩基性および過塩基性に分けて色で区別する。不区分花崗片麻岩は酸性岩とは別に色の Shade で区別する。時代は記号または模様で区別する。

##### b. 噴出岩

この場合は時代を色で分け、成分を模様で分ける。

#### (6) 地図の投影

フランスで準備した、ランベルトの正積円錐投影法 “Lambert conformal Conical Projection” と、ソ連提案の斜軸投影による正主距方位図法 “Oblique Azimuthal Equidistant Projection” の二案につき議論したが、結局両案を各国の地図局に送り、その結果をインドの地質調査所に送つて同所長が裁決する。

#### (7) 地形的基図

地質図の原図になる地形図に記入すべきことがらや色などを決定し、この地形図は投影法の決定後、国境や主要河川のような地形的骨組みが印度の地質調査所で準備され、次に関係各国に送られてから細部図を作る。

#### (8) 地質図出版のための財源

アフリカの国際地質図の場合は1000部で12,000ポンドであつたが、ECAFE 地域の場合は4,000部が必要で、15,000~16,000ポンドの経費がかかるが、本地域の各国政府はその経費を寄附すべきである。

#### (9) 次回 の 会議 および 場所

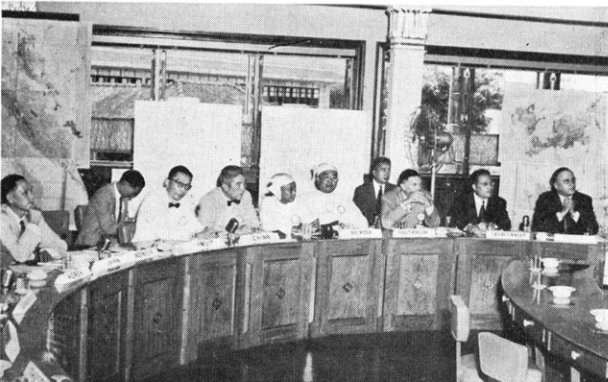
次回会議は約1年以内に開きインド地質調査所で地形図を準備し、参加国は1:200万の新地形図の上に基礎的地質図を準備する。

終りに本会は次回の会議を東京で開くという日本政府の招請を感謝をもつて記録した。

#### 各国の地質図の展示

会議期間中参加国の持参した1:200万地質図のほか1:500万~1:750万縮尺程度の地質図をインド・オーストラリア・ソ連などの国々が展示した。

更に感銘の深かつたことはアフリカ大陸全域の1:500万の地質図が展示されたことで、この図はECAFE 地域に先だち万国地質学会の規格に従い関係各国の協定作業によつて編さん完成したものである。



アジアおよび極東の地質図作成部会

最前列右より

ブロンデル氏(フランス)万国地質学会会長、チャン氏(国府)国連地図局員  
 ノークス氏(オーストラリア)、パーテンン氏(ビルマ)、パーテイ氏(ビルマ)  
 シヤアオ氏(国府)、ピク氏(国府)、河野氏(日本)地質調査所 地質部長

## オ一回 鉱産資源開発小委員会

この会議への参加国は14カ国、参加人員は約50名に達し、6日間の会議は次の主要議題について行われた。

- (1) 1953～1954年度のアジア極東の鉱業開発
- (2) ECAFE 地域における金属鉱業問題とその将来

### a. 錫

現在の錫生産額は過剰であるから、生産国の地質調査所や研究所に、産地の新規発見および増産に関して警告すべきである。

### b. アルミニウム

小委員会はこの地域のアルミニウム工業の順調な発展に鑑み、事務局に対して Gold Coast (Volta River) および仏領における新開発の資料を編さんし、本小委員会に提出すべきを勧告した。

### c. 新用途および用途増加の金属

チタン鉄鉱・コロンブ石およびタンタライト 鉱石は ECAFE 地域の数カ国から発見されている。

### d. 鉄 鉱

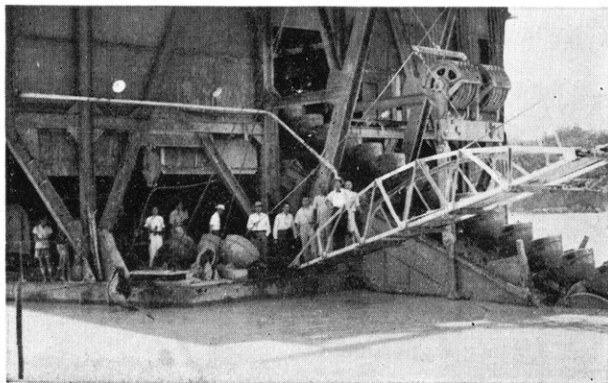
インドの鉄鉱資源は大規模の鉄鋼工業を支えるに充分であるから、同時に輸送施設が改善されれば多大の鉄石の輸出が可能となる。マライは鉄鉱石の輸出を継続することができ、ビルマ・フィリピン およびタイ国では追加鉱床の発見の望みが明るい。

日本はこれら諸国の鉄鉱石の大量の輸入を継続するであろうし、また本地域の鉄鉱石の生産は需要に応じられるので、生産と供給を確実にするためには輸出と輸入国間の協同動作を改善することが望ましい。

## (3) ECAFE 地域の燃料事情と改善の可能性

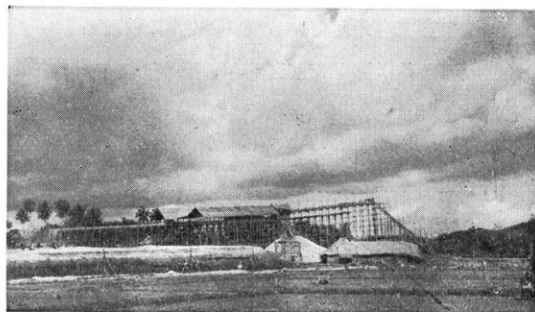
低品位炭の利用が議論され、オーストラリアの亜炭見学の報告書が配布された。

### タイ国内の見学旅行



ドレツジの見学 (プケット島 Katu 錫鉱山)

バケツ 容積 10立方フィート  
能力 約 185.000 立方ヤード/月  
月産 約 29トン (1949)



プケット島 錫鉱山

### (1) プケット (Phuket) 島の錫鉱床の見学

11月6日・7日の両日バンコックから飛行機による南部タイ、プケット島への視察旅行を行った。

プケット島の錫鉱床はカンブリア紀の千枚岩へ白堊紀の花崗岩の進入によつて生じたものであるが、現在稼行しているものはその後の風化によつて生じた原地砂礫鉱床、およびそれらが流れて堆積した沖積鉱床である。

他にグラベル・ポンピング (Gravel Pumping) 採掘法による露天掘鉱山2つと、ドレツジ (Dredge) によるもの1つを見学しが、前者の例として Chao Fah 鉱山は月産10数トンの小鉱山で、主として華僑の資本で行われており能率は良好である。

ドレツジの1例としては Katu 鉱山を見学した。ドレツジは一見軍艦のような外観を呈した浮べる工場であつて、ドレツジ1台に約10億円の大資本を要すると云われ、主として英人の資本で行われている。

### (2) 北部タイ、チェンマイ近郊 Mae Mo の亜炭鉱床の見学

この亜炭山は最近の開発になり、MSAの援助を受けていると云われ、現在はオーストラリアから Reinbach を主班とする数人の技師が派遣され開発が行われている。

起伏のある古い基盤岩上に堆積した、新しいオ第三層の亜炭で、緩傾斜の3層からなる。

幅500m、縦1,700mを100m間隔に基盤の目に切り試錐を行つているが、試錐機は自動車に固定し、移動に便にしてある。

発熱量は5000カロリー、埋蔵量は推定数百万トンで、優秀なものとは言い難いが北部タイ方面の唯一の亜炭資源として、将来はこの方面における工業の原動力となり得るであろう。

現地において圧力のみによる煉炭製造が開始されている。

(地質部長 河野毅胤)